

## 窮理通の成立について

佐藤義詮

帆足萬里(1778~1852)の窮理通という著作は、内容から言えば、今日の自然科学の初歩の学問であつて、獨創的とは言えないのであるが、主として儒学を修めた彼が、シナの窮理思想から出發して西洋の自然科学をその實證的なものとして受取つたことは、儒学の立場から考えると非常に獨創的だとも言えるし、また、彼及び彼の先驅者であつた三浦梅園(1723~1789)の学問を、日本の儒学史の上で、獨立学派と呼ばしめるに至つたことも充分肯ける。

儒学にあつては、窮理思想であつたものが、こういう自然科学的展開を遂げたことについての前後の事情は、窮理通著述の経過を記した彼の序文に判然としている。即ち、

「余の壯き頃、窮理通數方言を著す。蘭室先生爲めに序を作らる。已にしてその纒謬多きを以て之れを毀つ。四十余にして西籍を得て之を讀む。寒郷善師なきに苦しむ。唯譯語につきて搜索し、意倦れば則ち止み六七年を積みて稍その義に通ずることを得たるも、このごろ割職を承乏し棄てて治めず。去歲乙未疾を以て致仕す。乃ち西籍數部を取り譯定、繁を交り、繆をしりぞけ、附するに已説を以てす。仍ち名づけて窮理通と曰ふ。先生の片を簡首に置くは本を忘れざることを示すなり」(原漢文)

文中に乙未とあるのは天保6年であつて、この序文の書かれたのは萬里59才の天保7年(1836)であるが、この書に、文化7年(1810)の脇鞠室の序文を卷頭に置いてある。先生の序文というのはそれを指しているのである。従つて、20數年前の舊稿窮理通と天保の窮理通との間には内容的には少しの連關もないことが明らかである。

ではこの古い窮理通が如何なるものであつたらうかということを考えてみると、萬里は蘭室の序文を、「簡首に置くは本を忘れざることを示す」ためだと明言しているのでも分かる様に、そのことは彼自身に於いて窮理という一貫した思考のあつたことを示している。

そして更に、一貫した思考でありながら、結果に於いて著しい變化をなしたことの根據は、彼自身の語つてゐる通りに西籍、即ち、西洋の自然科学書を讀んだことに始まつたことも如上の通りである。

彼は、窮理通でまたこの著作への引用和蘭書目として、13冊の外國書を擧げているが、それは著述上の参考書目であつて、西洋の学問に目を轉ずる思想的原因となつたものでないことは言うまでもあるまい。ではそれは何かと言へば、和文の窮理通に於いて初めて考えらるべきだからである。

これは半紙195枚を全部で8巻と明記した小冊子で、その殆んどが(その凡てに目を通した譯ではないが)、Petrus van Musschenbroek(1692~1761)の,"Beginsels der Naturkunde,

Beschreeven ten dienste der Landgenooten”の抄譯なのである。

これは彼が和蘭語を学んで得た智識のまゝの窮理通であるばかりでなく、ミユスエンブロックの窮理通である。かつて、萬里の門下であつた岡松莚谷が、安政3年に現在行われている窮理通の内3巻を木版に付したとき、彼はその序文のなかで

「先生この書を選び、已に和言を以て二、三條を譯し、辰輩に授けて更に寫すに漢文を以てせしむ」

と書いている和言のものはこれを指すのであろう。してみると西洋の自然科学書の譯述を中心とした窮理通と、蘭室の序文の舊稿を比較して考えるとすればどういうことになるであろうか。それは萬里自身に於いて、窮理思想 Natural philosophy と云ふべきものが自ら自然科学 Natural science へ展開したことを意味するかどうか。(舊稿がなかつたとすれば、これは或は教授用のテキストと考えてもいいが、前稿を繼續したことから言えば寧ろ思想家萬里と考へべきであろうから)

元來、窮理という言葉は、易の説卦に、「理を窮め、性を盡くし、以て命に至る」とあり古代のシナ思想に於いては強いて自然哲学の観点に立つものと解釋しなければならないものでもないと考えられるし、日本に移つて來た儒学でも metaphysic な概念として取扱われ、その素地もなかつたからではあるが Natural science についての学としては生長しなかつたであろう。

この意味からすれば日本の儒学者のなかで、シナ思想の Science を正しく採り上げて論じたのは獨り三浦梅園のみであつた。そして梅園の思想から、その Natural philosophy の重要性を觀取したのが萬里であつた。

自然哲学から自然科学への道でなく、單に科学思想の輸入という事では、當時でも萬里に先行して、例えば青地林宗の氣海觀瀾のような科学の分野がすでに開拓されつゝあつたことは萬里も充分承知していたに違いない。

従つて彼が自序のなかで自分の論述に冠するに「仍ち名づけて窮理通といふ」と云つているのは、彼が新しい学問の創立を意識していたとも考えられるし、同時に梅園的な自然哲学からの出身を物語つていてと考えてもよいであろう。

梅園は自分の学問を條理学と云い、萬里は窮理と云つているが、この兩者の理の概念は何れも蘭室が説明を加えている様に「宋の諸賢の窮理の説」の理に共通するものであり、「理氣」の理に當るものであろう。

しかし、朱子語類で「天地之間 有理有氣 理也者形以上之道也 生物之本也 氣也者形以下之器也 生物之具也」と言つているような解釋のなかには、Science であつても、自然哲学を背景とするものの理であつて、自然科学としては當時了解し難かつたに違いない。しかし、こういう理の概念が長い間日本の学問を支配していたことを考えると、蘭室が梅園を評して「往々支に病有り」と言つていても、metaphysic な概念を拂い去ることは言葉そのもの、概念自身のなかに無理があつたと考へてよいであろう。

## 文 献

帆足萬里全集

日本科学古典全書第1巻

日本科学古典全書第6巻